

安倍能成

輕易なる懺悔

輕易なる懺悔

近頃文壇によく懺悔ざんげという詞ことばを聞く。しかし自分は世間が懺悔ということを容易なことと考えて居るのを、非常に物足らず思う。或あるいは「懺悔」という言葉が、「真面目」とか「考えさせる」とかいう言葉と同じく、又軽々に使用せられはすまいかとおそれる。自分の考をいえば、九月に出でたS氏の所謂懺悔の如きは、一種の告白であろうけれども、決して懺悔とまで呼ばるべきものではない。S氏のあの告白がS氏の内心の止むに止まれぬ要求

から出たものであるとは、どうしても思われぬ。随分左顧右眄こうべんの多い、自己の内心からの動機の極めて弱い告白である。世間が通り一遍に真面目だと批評して居るのは、真面目真面目といつて居る人に、実際は真面目の経験が極めて貧弱なことを証明して居ると思う。

自己の不安紛乱をそのままに懺悔するといふけれども、これは決して懺悔の心持を多少なりとも経験した人の言とは思えない。不安と紛乱とに堪え得ぬ所の、或る要求を有する人でなければ、懺悔はなし得ない。不安紛乱を眺めて居る人には懺悔はない。我々が若もし懺悔する

とすれば、それは何等かの形式に於ける自己批評の結果であることは明かである。しかし我々は不安紛雜の唯中ただなかに居ては、決して自己批評の出来ないことを経験して居る。かかる時我々は自分を批評しようとしても、何れいずの方面にも徹底し得ない。何等かの徹底がなくして批評はあり得ない。従つて懺悔はあり得ない。我々が痛苦に堪え得ず、又不安に堪え得ずして、絶叫の声をあげる場合にも、この不安や痛苦を束ねた強い要求がなければ、懺悔の気持になれないことを考えても、このことは分ると思う。自分はどうしても懺悔は真の意味に於て宗教的な

るものであると思う。ここにいう宗教的要求とは徹底の要求であるといえる。S氏の告白などにはこの徹底の強い要求がない。懺悔とすればひからびた懺悔である。

自分は嘗て正宗氏の『紅塵』や『何処へ』を興味を以て読んだ。それはその当時の自分を、大分此等の作の中に見ることが出来た為であつた。それから作者自身の感情や思想を、多少の誇張や作為はあつたらうが兎に角なげやりに出した所に、一味のシンセリチーがある様な気がして、それに引かれた。然し自分は決して、此等の作を以て、深い懺悔の気持のあらわれて居るのものとは思

わぬ。論者はよく「考える」というけれども、我々が『紅塵』などを読んで「考える」のは恰あたかも歩きくたびれた身体を漸ようやく電車の片隅に置いた位の程度であつて、極めてあわただしい「考える」である。固より深い沈思もなく、また徹底的な自己批評もあり得ない。人と己おのれとを嘲あざけりながら、時々あざけの刺戟に漸くその日その日を送る人間に、懺悔のあり様がない。要するに最近の我が文壇には懺悔はまだ現われて居ない。

然し我々は決して上の様な状態に安んじ得られるものではない。今の文壇について述べる暇もないが、兎に角

一時の不安^{そつぼう}匆忙を通過して、今はやや静ま^つつて居るらしい。恰もかしこの岩ここの岩へと衝き当^つたりたりはね返^つたりして居た水が、やや静かに湛えられたが湛えられた水がそのまま沈滞してしま^うか、岩を破^つつて淙^{そう}々然^{ぜん}と新たな境地へ落ちて行くかという形勢にある。

我々は我々の現状に満足し得ない。自然主義文学の底には宗教的要求が流れて居るとい^う人があるが、これは現実感を重^んずる自然主義文学でも、徹底せんとしては宗教に赴かざるを得ないと改める方がよい。この意味に於いて懺悔は望ましいことである。唯我々は真の懺悔の

外から人工的になされるものでないことを知って居る。
我等の如き不純な者が懺悔をなすは容易でない。真に懺
悔をなさんとする者は、みだり妄に懺悔をなさぬ用意がある
べきであろう。人間徒いたずらに懺悔すべけんやである。軽
易なる懺悔は、懺悔でない。（明治四十二年十月十二日）

日本文学電子図書館

輕易なる懺悔

著 者：安倍能成

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文學大系 40
筑摩書房

昭和48年2月20日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館